

孤独を癒やすということ  
— アーノルド・ローベル「おてがみ」を読む —

Curing somebody's loneliness :  
An interpretation of Arnold Lobel's *The Letter*

山本 欣司

YAMAMOTO Kinji

武庫川女子大学 学校教育センター年報

第4号 2019年

孤独を癒やすということ  
—アーノルド・ローベル「おてがみ」を読む—

Curing somebody's loneliness :  
An interpretation of Arnold Lobel's *The Letter*

山本欣司\*  
YAMAMOTO, Kinji\*

要旨

小学校国語教材「おてがみ」(アーノルド・ローベル)は、一般に理解されているように、手紙をもらったことが一度もなく落ちていたがまくんが、かえるくんから手紙をもらい、元気を取り戻す物語ではない。注目すべきは、がまくんを驚かそうと思ったかえるくんが、足が極端に遅いかたつむりに手紙の配達を依頼するというドジを踏んだことである。これにより、以降の展開はかえるくんの目論見通りにならず、がまくんの喜びも幾分か減じたはずなのである。ところが、その失策がかえって思いもかけない豊饒な結果をもたらすところに、この物語のユニークな特質がある。他者の孤独を癒やすための実践的な知恵が、さりげない形で盛り込まれているところに、「おてがみ」という物語の素晴らしさがある。

キーワード：アーノルド・ローベル 「おてがみ」 国語科教育 教材研究 作品論

1

現在、すべての小学校国語教科書に掲載されているアーノルド・ローベル「おてがみ」<sup>(1)</sup>は、たいへんユニークな物語である。かえるくんとがまくん(がまがえるくん)というふたりのかえるのやりとりを中心に物語は展開するが、そこには他者の孤独を癒やすための実践的な知恵が、さりげなく盛り込まれている。はじめに、あらすじを紹介しよう。

- ① 手紙をもらったことが一度もなく、毎日がまくんが不幸せな気持ちになることを知ったかえるくんは、自分も悲しい気分になる。
- ② かえるくんは、大急ぎで自分の家へ帰るとがまくんに手紙を書き、かたつむりに配達を依頼する。
- ③ がまくんの家へ戻ったかえるくんは、一緒に手紙の到着を待とうとがまくんを誘うが、がまくんの反応は芳しくない。なかなか来ないかたつむりを待ちながら、反発すら示すがまくんを懸命に説得するうちに、かえるくんは自分が手紙を出したこととその内容をすべて話す。感動したがまくんとかえるくんは、幸せな気持ちで手紙を待つ。
- ④ ふたりがずっと待っていると、四日後にかたつむりが家に到着し手紙を渡してくれる。がまくんはとても喜んだ。

さて、先ほど「おてがみ」はたいへんユニークな物語であると述べたが、じつは上記のようにオーソドックスに要約したのでは、その特質はこぼれ落ちてしまう怖れがある。というのも、かえるくんがドジを踏んだこと。それによって物語は思いがけない方向に展開してしまうからである。かえるく

---

\* 日本語日本文学科教授

んが目論見としては、サプライズ・プレゼントを贈ることで、落ち込むがまくんを喜ばせたいというものであったと考えられるが、失策のせいで狙いどおりに事は運ばなかった。結果的にがまくんは喜んでくれたが、プレゼントそのものの効果は、明らかに減じたはずなのである。このことを無視して、「おてがみ」という物語を理解することはできない。ネタばらしに追い込まれたのも、四日間の遅延も、もとはといえばかえるくんのミスが原因なのだ。

ところが、先行研究や授業実践報告を検討すると、「かえるくんから手紙を贈られたことで、がまくんは元気になりました。めでたしめでたし」というような解釈ばかりが目につく。この物語の重要な仕掛けである、かえるくんの失策と、それがもたらしたものの意味が看過されているのである。そして当然のことながら、怪我の功名というべき予想外の大団円に言及するものは多くない。検討すら、あまり行われていないのである。

どんな形であれ、手紙は届けば十分なのだろうか。ネタばらしも、お調子者のがまくん相手ならご愛敬。想いさえ伝われば、物語の傷にはならないと考えるべきなのか。文学教材は、細かいことなど気にせず、読んで感性が豊かになればそれで十分との立場もあろうが、国語教育において近年、教材を批判的に読むことが求められているのだとすれば、この物語固有の展開を無視することは論外である。

手紙そのものは、いわば小道具にすぎないのであるから。

## 2

大学の授業で小説を扱う際、初読の段階で学生に、解釈にまつわる疑問点をあげてもらおうようにしている。これは、小説を読み深めるための有効な手立てである。小説読解の授業でわたしは頻繁にこの方法を用いる。感想ではなく<sup>(2)</sup>、学生自身の疑問を足がかりに作品世界に切り込んでいくのである。簡単な短編であれば、本文読了後ただちに箇条書きのようなメモを書いてもらう。読みごたえのあるものであれば二、三週間の余裕を見て 1600 字程度 (A4・一枚) のレポートの提出を求める。ゼミでもつねに、ストーリーを鵜呑みにせず、疑問を持ちながらさまざまな角度から小説を読むよう指導する。

アーノルド・ローベル「おてがみ」を、大学での授業の導入や、高校生向けの出前授業で教材として活用するようになってずいぶん経つ。小学校で習ったという学生・高校生が大勢いるが、ここでも必ず疑問点をあげてもらう。さまざまな疑問が出てくるが、主なものとしては、

- ・がまくんは、一度ももらったことのない手紙をなぜ、毎日待つのか。
- ・かえるくんはなぜ、あれほど足の遅いかたつむりに手紙の配達を依頼したのか。
- ・かえるくんががまくんの家に戻ると、がまくんは怒ったような態度を示す。がまくんが手紙を諦めたようであるのはなぜか。
- ・かえるくんはなぜ、自分が手紙を出したことや内容をすべて話してしまうのか。そんなことをしては、台なしではないか。
- ・内容を教えられた手紙をもらって、がまくんはうれしいのか。
- ・何のために四日間も待たなければならないのか。

というようなものである。

これらの疑問は、物語の説明不足な箇所(空所)を示していると同時に、学習者の理解の枠組みをも示しており、たいへん示唆的である。疑問を解きほぐしながら、「おてがみ」について考えていこう。

\*

さて、がまくんが毎日手紙を待たずにいられないというのは、それほど不思議なことだろうか。先にあげた疑問には、手紙が来ないとわかっているなら、さっさと諦めればよいというドライな認識が示されているのかもしれないが、わたしたちはそれほど物わかりがよいわけではない。誰しも、諦めきれないもの＝何かへの執着に駆り立てられるようにして、行動してしまうことがある。重要なのは、がまくんが彼我の違い＝欠落に気づいてしまった点である。だれかの郵便受けに手紙が届けられるところを目撃したのかもしれない。がまくんは、自分が一度も手紙をもらったことがないという事実に関心を痛める。そしていつかきっと、皆と同じように、自分の郵便受けにも手紙が届くであろうと信じ、諦めずに待っているのである。毎日不幸せな気持ちになりながらも、それでも手紙を待ち続けるがまくんは、けなげだ。

かえるくんは、そんながまくんの悲しみを思いやり、自分が内緒で手紙を贈るというアイデアを思いつく。サプライズ・プレゼントである。手紙を心待ちにしているがまくんを早く驚かそうと、かえるくんは大急ぎで家に帰ると手紙を書き、ふたたび家を飛び出した。そこでたまたま出くわしたのが、かたつむりであった。学生の指摘どおり、これが間違った選択であることに関しては、誰も異論を挟まないだろう。かえるくんはドジを踏んだわけである。かえるくんは、かたつむりの足が極端に遅いという認識がなかったことは、

「きみ、おきてさ、おてがみがくるのを もうちょっと まって みたら いいと おもうな。」

「いやだよ。」がまくんが いいました。

「ぼく もう まっているの あきあきしたよ。」

かえるくんは まどから ゆうびんうけを 見ました。かたつむりは まだ やって きません。(下線引用者、以下同様)

というやり取りに明らかである。「もう ちょっと」と「まだ」の呼応は、かえるくんの認識の甘さを物語りものである。彼は思慮が浅い。かたつむりに手紙の配達を依頼したのは、かえるくん痛恨のミスであり、それにより物語は思いがけない展開を見せる。かえるくんの狙いどおりには進まなくなるのである。

たとえばかえるくんが、適切な知り合いに手紙の配達を依頼していた場合を考えてみれば、この物語が達成できなかったことの大きさが見えてくる。都合よく、ふたりが見守るさなかに手紙が届いたとしたら、がまくんは驚くと同時に、もつとストレートに飛び上がって喜んだに違いない。願いが叶ったわけであるから。そのように、目論見どおりにサプライズが成功した場合と比較するなら、この物語において手紙が届いたことの効果そのものは、半減したのではないか。周知のごとく、いつまで待っても手紙が届かないせいで、とうとうかえるくんは、自分が手紙を出したことを明かす羽目に陥り、内容をすべて口頭で述べてしまうのである。手紙の到着にもずいぶん時間がかかった。

そのようなかえるくんの失敗を、読者が素直に受け入れられるはずがない。展開は、グダグダなのだ。プレゼントが到着する前に、中身を話してしまうなどもつてのほか。大学生はいうまでもなく、小学2年生ですら、「お手紙を出していることを言わないでいるほうが、お手紙が届いたときのがまくんの喜びがすごい」<sup>(3)</sup>と指摘するし、授業者から「みんなだったら、手紙になんて書いたのと聞かれたら答えるかな？」と質問されれば当然、「届いてからの楽しみだって言う。」と応じるのである<sup>(4)</sup>。そういう意味で、「おてがみ」がハッピーエンドを迎えられたのは、ふたりが似たもの同士で、同じくらい大雑把な性格であったおかげかもしれない。多くの学習者が、物語の展開への違和感を口にすると、それは当然である。そのような展開があえて選ばれているのだから。

かえるくんはサプライズを狙っていた。理由を隠してがまくんの家を足早に立ち去ったことや、書き上げた手紙をわざわざ他人に配達してもらおうとしたこと。がまくんの家に戻ってからも、「ひょっとして だれかが きみに てがみを くれるかもしれないだろう。」などと、わざと曖昧な言い方で、がまくんの気を引き続けていたことが、その根拠となる。

だが、そのような狙いも、うっかり依頼したかたつむりの足の遅さのせいで台なしになる。いっこうに手紙が届かないため、何度も窓から外を覗くかえるくんは、その行動をがまくんに見とがめられ、すべてを明かすことになるのである。

\*

ところで、自分が手紙を出したことを明かしたかえるくんは、「てがみに なんて かいなの？」というがまくんの問いかけに答えて、あろうことか、手紙の全文を暗誦する。

「しんあいなる がまがえるくん。ぼくは きみが ぼくの しんゆうで ある ことを うれしく おもっています。きみの しんゆう、かえる」

学習者が、ラストシーンでがまくんは内容がわかっている手紙を受け取ってうれしいのかと疑問を呈するのをもっともである。隈なく知ってしまったのは、実際に手紙を受け取った時の楽しみが失われてしまうのではないか。

この手紙の内容について、先行研究において意見の応酬があるのはたしかだが<sup>(5)</sup>、それが心のこもったものであれ、形式的なものであれ、大切なのはこの時点でメッセージが十全に伝わったという点である。がまくんの口からも、思わず「ああ、(略) とても いい てがみだ。」という感動の言葉がもれた。大急ぎで書き、封をした手紙ではあるが、そこに込められたかえるくんの想いを、がまくんはしっかり受け止め、喜んでいるのである。満ち足りた様子でメッセージが受け止められたということは、この時点で当初の目的はある程度、達成されたと解釈すべきだ。

そして、「おてがみ」がもし、手紙をもらったことがないがまくんの不幸せな状態が、手紙を受け取ることによって幸せな状態に変化する物語であるとするなら、「それから ふたりは げんかんに でて てがみの くるのを まって いました。」という心温まる一文をもって、幕を下ろすべきである。間もなくかたつむりが手紙を届けてくれるであろうことを予感させつつ、ふたりが肩を並べて幸せな気分になるこのシーンは、物語のフィナーレにふさわしい。

がまくんの願いはようやく叶い、心を打つメッセージを受け取ることができた。たしかに手紙本体はまだ到着していないが、もうすぐ確実に届くというところまでこぎつけた。これ以上、何も望む必要はないと思われる。ところが、この物語はまだ幕を閉じることができない。さらに四日間という、途方もない時間が必要とされているのである。これはいったい何故だろう。

3

がまくん同様、たいていの人間は粗忽にも、いつもそばにいる人の価値を見失ってしまう。物語冒頭で、がまくんが浮かない顔をしていることを見て取り、即座に「きみ、かなしそうだね」と声をかけるかえるくんは、その一点を取り上げて十分、がまくんのことを気にかけてくれる、よい友人である。また、がまくんから不幸せな気持ちでいることを聞かされた後、そのようなネガティブな気分をわざわざ共有し、玄関先で寄り添うかえるくんは、本当に友達思いである。

だが、そんな友人がそばにいるにも関わらず、がまくんは自分の郵便受けに手紙が届かないという目の前の一点に囚われ、毎日郵便受けを眺め続けているうちに不安を膨らませる。そして、「ぼくに

てがみをくれる人なんているとはおもえない」との考えを手放せなくなる。孤独感に触まれ、自縄自縛の状態に陥ってしまったのである。手紙が届くというのは素敵なことに違いないが、来ないからといって、それだけで絶望する必要はないにもかかわらず。

言葉は、そんながまくんの孤独を癒やす力を持つのだろうか。「おてがみ」を読む限り、答えは否である。先に述べたように、自分は誰からも手紙をもらったことがないという事実に関わり、そこから目をそらすことができなくなったがまくんに、かえるくんは心のこもったメッセージ＝言葉を届ける。がまくんも「とてもいいてがみだ」との感動の言葉を漏らし、メッセージをしっかり受け止めた。もしそれで、がまくんの孤独が癒えたなら、二人が「とてもしあわせなきもちで」玄関ポーチに座っているシーンでこの物語は閉じられたはずである。書名どおり、「ふたりはともだち」であるというメッセージは明確に伝わったわけであり、「めでたしめでたし」のはずである。

だが、「おてがみ」はそれで幕とはならなかった。まだ、なにかが足りないのである。

第三者の存在だろうか。たしかに、かたつむりが手紙を届けてくれることにより、友達の輪が広がったと考えられなくはない。しかし、そういった解釈も、付記に記したとおり、かたつむりは本来、呼び捨てにされる脇役にすぎないため否定される。そもそも、がまくんは友達が増えることを望んでいたわけではない。自分に手紙をくれる人がいるとは思えないという絶望的な思いを抱えていたがまくんは、たった一人でも親友の存在を確信し得たなら安心できたはずだ。自分には、かえるくんという親友がいる。そのことを実感できれば物語は幕を閉じられるのである。しかし、それにはさらに四日間、必要であった。

アーノルド・ローベル「おてがみ」は、あしかけ五日にわたる物語である。おそらく、わざわざそのように指摘されると学習者は、何のためにそれほど長い時間が必要だったのかと疑問を持つに違いない。手紙を配達するのが足の遅いかたつむりであるにせよ、これほど長い間、二人が待つ必要はあるのか。かたつむりの到着は、手紙についてのやりとりを行った日の夕方くらいで十分ではないのか。出された手紙は受け取らなければならないという物理的な制約はあるにせよ、ネタばらしによって、メッセージは既に伝わっているにも関わらず、四日間も待ち続けるのはなぜなのか。がまくんはよほど、「手紙そのもの」のやり取りに憧れや執着があったと考えるべきなのだろうか。

がまくんは当初、郵便受けがいつも空っぽであることを嘆いていた。だが、郵便受けに手紙が差し入れられるという行為そのものへのこだわり（執着）を持っていたわけではないことは、かたつむりから直に手紙を受け取っている挿絵からもわかる。直接手紙を渡されたにも関わらず「がまくんはとてもよろびました」。そういう意味で、郵便受けが空っぽであるという表現は比喩的なものであったわけだ。

もしかすると、初めて受け取る手紙の重みや手触りそのもの、モノとしての存在感が何よりも大切だったと考えるべきなのかもしれない。あるいは、配達遅延は、受け取る喜びをいっそう際立たせるから、だから四日間必要なのだとの考えも否定はできない。しかしさすがに、四日間は引き延ばしすぎだ。

がまくんにとって、手紙が届くのを待つこと自体が大切だったと考えることは可能であるが、それでもなお、何ゆえの四日間だったのかという問いは残る。私たちはようやく、最も重要な問いにたどり着いたことになる。——**がまくんが本当に欲しかったものは何だったのか。**

かえるくんが手紙を書き家に帰り、ふたたびがまくんの家へ戻ってみると、がまくんは昼寝をしていた。かえるくんが起きて手紙を待とうと声をかけると、がまくんは意外なほど強く反発する。ふてくされ、ベッドから起き上がろうとしないがまくんは、激しい怒りの言葉を投げつけるのである。

「ぼくに てがみを くれる 人なんて いるとはおもえないよ。」

「いままで だれも おてがみ くれなかったんだぜ。きょうだって、おなじだろうよ。」

落ち込みから怒りへという、がまくんのこのような態度の急変については、多くの学生が疑問を持つ。がまくんはなぜ、攻撃的な態度を示し、手紙をもらうことを諦めたようなのかと。最初の場面（がまくんの家の前）で、がまくんの悲しそうな様子に気づき、事情を聞いたあとは、寄りそいながら悲しい気分を共有してくれたかえるくんに対して、がまくんが手のひらを返したような強い口調の言葉を投げつけたことに、多くの学生は違和感を拭えないようである。この箇所は、必ず疑問点にあげられる。ことに直前の場面で、がまくんに手紙を書いたかえるくんの優しさを知る読者からすれば、がまくんの態度は理不尽に思えるのだろう。

しかし、がまくんからすれば、あのような態度の急変にも理由がある。何といてもがまくんは、直前の場面で悲しい気持ちのまま、玄関先に一人取り残されたのであるから。かえるくんからも見捨てられたかのように。

かえるくんはがまくんを驚かせるために、急に用を思い出したと告げて、大急ぎで自分の家に向かった。それはがまくんのことを思っただけの行動であった。しかし、がまくんからすれば、自分が孤独だということを痛感させられたに違いない。友達にすら置いてけぼりにされる寂しさを味わったことが、上記のような絶望的な台詞につながったと考えられるのである。

そして、あの場面のがまくんの台詞は、がまくんの抱える問題がどのようなものであったかを読者に教えてくれる。がまくんは手紙が来ないことを嘆きながらも、「ぼくに てがみを くれる 人なんて いるとはおもえない」こと、「いままで だれも おてがみ くれなかった」以上、今後も同じに違いことを、叩きつけるような言葉で述べる。がまくんにとって手紙とは、自分のことを想う誰かが贈ってくれるものである。自分のポストがいつも空であるのは、自分を気遣ってくれる人が誰もいないことの表れだとはがまくんは訴えているのである。がまくんは、自分が孤独であるという絶望的な認識を持っていたのだ。

したがって、先ほど示した問いに答えるなら、がまくんが本当に欲しかったのは、手紙をくれるような友達だったということになる。すぐそばに、かえるくんという親友がいるにもかかわらず、視野狭窄に陥ったがまくんには、それが実感できなくなっていたのだ。

そんながまくんの孤独は、言葉では癒やすことができない。もっと別のなにかが必要で、それゆえの四日間だったと捉えるべきだ。「おてがみ」という物語は、誰かがじっと寄り添ってくれることの意義を教えてくれる。四日間にわたって、かえるくんはひたすら、いつとも知れぬ手紙の到着を待つために、がまくんのそばにいた。何の底意もなく、彼は単純に、なかなか来ないかたつむりを待ちながら、がまくんの隣に計算抜きで義理堅く座っていたはずである。

そのようにして、誰かが自分に寄り添い続けてくれること。そのことががまくんに与える安心感こそが大切なのだ。物語において詳しくは語られないものの、彼らは四日間にわたって幸福感に包まれながら、手持ち無沙汰な時間を埋めるために、どうでもいいおしゃべりを続けていたはずだ。がまくんにとってそれは、何よりも素敵なプレゼントだったはずである。それにより、がまくんの孤独はようやく癒えたのである<sup>(6)</sup>。

かえるくんのドジのせいで、少し残念な展開になったにもかかわらず、物語は素晴らしい達成を果たした。失敗が、望外の豊饒な結果をもたらしたという意味でもユニークだが、当人達も、もしかするとその達成に気づいていないかもしれないという意味でもユニークだ。「おてがみ」は、謙虚で押しつけがましきのない、ひねりの利いた物語なのである。

## 付記

今回、さまざまな教科書と原作のアーノルド・ローベル「おてがみ」(『ふたりは ともだち』文化出版局、一九七二・一一、三木卓訳)を比較して、驚いたことがある。本文の記述がいくつか変更されていて、その影響が、内容把握にも及びかねない点である。

たとえば、「かたつむりくん」という呼称がある。

一番最初に私は、教科書本文で「おてがみ」を読んだため(『ひろがることば しょうがくこくご 1下』教育出版、平成一六年)、この物語には、かえるくん、がまくん、かたつむりくんの三人が登場するのだと捉えていた。中心となるのは、かえるくんとがまくんであるが、かたつむりくんは同レベルの存在感を有し、最後の場面で相まみえた三人はその後、仲のよい友人として親交を深めていくのだろうと読み取った。

だが、原作を確認すると、かたつむりの扱いは、明らかに一段劣る。三人称の語り手が説明する部分(いわゆる地の文)では、中心人物の二人はつねに「かえるくん、がまくん」と、くん付けで呼ばれているのに、かたつむりは

かえるくんは いえから とびだしました。

しりあいの かたつむりに あいました。

「かたつむりくん。」かえるくんが いいました。

「おねがいでけど、この てがみを がまくんの いえへ もって いって、ゆうびんうけに いれてきて くれなにかい。」

「まかせてくれよ。」かたつむりが いいました。

「すぐ やるぜ。」

というように、呼び捨てにされているのである。これは最後の、四日後に手紙を届ける場面まで、一貫している(「四日 たって、かたつむりが がまくんの いえに つきました。」)。

原作 *The Letter* も同様に、かえるくんとがまくんはそれぞれ、Frog、Toad というように、冠詞なしの大文字で始まる呼び名となっているのに対して、かたつむりは、a snail、the snail などと、普通名詞で呼ばれる。

Frog ran out of his house.

He saw a snail that he knew.

“Snail,”said Frog,“please take this letter to Toad's house and put it in his mailbox.”

“Sure,”said the snail.“Right away.”<sup>(7)</sup>

語り手によるキャラクターの位置づけには、明らかな差がある。かえるくんとがまくんは同じ重みを有するメイン・キャラクターであるが、かたつむりは脇役で、手紙を届けてくれる人にすぎない。かえるくんは、手紙の配達を依頼する際「かたつむりくん」と丁寧と呼ぶが、語り手からすれば、くん付けする価値はない。気の毒ではあるが、五日間も努力してくれたにもかかわらず、知り合い以上の存在感は持たせてもらえないのである。

したがって、かたつむりの到着後、友人関係の輪がひろがり、「さんにんは ともだち」になるという解釈は成り立ち難いと思われるが、教科書は明らかに、そのような解釈を誘っている。少なくとも、いくつかの授業実践においてはそのような方向で言語活動が行われている。これは物語内容の改変というべきではないか。

そのほかにも、訳者・三木卓による「おてがみ」「てがみ」の表記の使い分けが、教科書によって



はすべて「お手紙」に統一されていることにも強い違和感を覚えた。とくに、かえるくんが手紙の内容を明かした後に、がまくんが言う台詞。「とても いい てがみだ」を「とても いいお手紙だ」に改変するのは、拙いと思う。「とても いい てがみだ」という断定は揺るぎない。がまくんの感動がストレートに伝わってくる台詞で、純粹に、メッセージの内容に心を動かされた様子が表されていると思う。一方、「いいお手紙だ」などと丁寧に、配慮ある言葉を選んでいては、あの瞬間の感動は、どこかへ逃げていってしまうのではないだろうか。慇懃無礼にすら感じられるほど、不似合いな台詞であると感じられる。

教科書出版にあたっては、さまざまな大人の事情が働くのかもしれないが、雑誌『赤い鳥』の編集長・鈴木三重吉が、雑誌掲載に際して芥川龍之介「蜘蛛の糸」を改変したことに対する違和感と同様のものを私は感じるのである。訳者・三木卓の了承済みであるとしても、表現に手を加えることにはもっと慎重であるべきだ。

## 注・引用文献

- (1) 「おてがみ」は現在、平成二七年度版・検定教科書のすべてに掲載されているが（配当学年は、教育出版のみ一年生、東京書籍・学校図書・三省堂・光村図書出版は二年生）、それぞれの教科書本文に異同があること、見どころがたい変更が加えられていることに鑑み、本稿では三木卓訳による原作（『ふたりは ともだち』文化出版局、一九七二・一一）を本文として用いることとする。
- (2) 学習者がその教材にどのような感想を持つかという問題は、学習者個人の学習意欲に深く関わるとは思うが、感想自体は当人の価値観（嗜好）に深く根ざしたものであり、授業にあまり持ち込みたくない。むしろ、個人的な感情に流されないよう注意しながら、客観性を大切に教材読解を進めていくことが大切なのではないかとわたしは考える。したがって、初読の疑問点をあげてもらう際は、感想を聞いているわけではないと、強めにアナウンスする。小説といえば感想だというように思い込んでいる学習者があまりにも多いからでもある。
- (3) 裕起代『『お手紙』～がまくん・かえるくんの気持ちを思いうかべながら読もう～（国語2年B組）』『和歌山大学教育学部附属小学校紀要』30、2006/3/1
- (4) 作間慎一「児童の文学作品の謎解き読みに関する実践的検討—謎解き読みによる『お手紙』のアспекトの転換—」『教授学習心理学研究』8-2、2012
- (5) 宮川健郎「かえるくんの手紙は、『素晴らしい』カーアーンロード・ローベル『お手紙』を読む—（『日本文学』44-1、一九九五・一）をきっかけとする議論。たとえば、跡上史郎『『ない』ことにまつわる『ふしあわせ』と『しあわせ』—アーンロード・ローベル『お手がみ』について—（『文学の力×教材の力 小学校編1年』教育出版、二〇〇一・三）、足立悦男『『お手がみ』再論—教材としての魅力—（『文学の力×教材の力 小学校編1年』教育出版、二〇〇一・三）、中村 哲也「交換から贈与への物語—教材『お手紙』（A・ローベル）の〈読み〉への視座—（『岐阜聖徳学園大学国語国文学』35、二〇一六・三）などが、見解を表明している。
- (6) 高木まさき氏も同様の観点から四日間という時間の重みに着目する。そして、  
「がまくん」を喜ばせているのは、手紙のメッセージもさることながら、「かえるくん」が一緒に居てくれること、あるいは四日間も一緒に手紙を待ち続けてくれたということ、それが大きな意味をもっていたことが分かるのではないか。つまり、「かえるくん」は「がまくん」とともに長い時間を過ごすことで、言葉だけでは伝わらない、本当に大切な何かを伝えることができた。そしてそこにこそ「親友」であることの真の証があったと言えるのではないか。（高木まさき『情報リテラシー—言葉に立ち止まる国語の授業—』明治図書出版、二〇〇九・十一）

と述べている。慧眼というべきであるが、惜しむらくは詳しい説明が端折られている点と、それがかえるくんの主体的な行動であるかのように表現されている点である。自分のミスの責任をとるためにした行動が、結果的に思いもかけない素敵な結果をもたらしたという、この物語特有の押しつけがましきのないところが、うまく説明できていないように思える。

(7) Arnold Lobel *Frog and Toad Storybook Treasury* HARPER 2014